

## 文学や漫画から見る近現代の遍路

青木 亮人 (愛媛大学教育学部准教授)

**Modern Shikoku pilgrims as seen in manga and literature****Makoto AOKI****Associate Professor, Faculty of Education, Ehime University**

When people think of modern literary works and the culture of the Shikoku pilgrimage route most conjure up materials such as pilgrim travelogues written by famous cultural people. For example, "Musume Junreiki" (1918) by Takamura Itsue (1894-1964) or "Shikoku Henro Nikki" (1939) by Taneda Santōka (1882-1940), which are two representative works. In these books the part that most people remember best is perhaps the description of the beautiful view of Kashiwazaka Slope in "Musume Junreiki" or the description of Daihōji and Kumakōgen town in "Shikoku Henro Nikki." However, these two works only have the Shikoku pilgrimage as their purpose therefore they mention a lot about the temples at the sacred sites and other places and mention very little about the surrounding landscape and the pilgrimage path itself. The famed works left behind by these two authors in the modern age are unique in that they contain many references to the sacred sites being "dots" and few references to the pilgrimage path being a "line." However, because the two above-mentioned authors are so well-known their works are still widely acknowledged today and so literary works about the Shikoku pilgrimage path left behind by numerous other famous and not famous cultural people are not really known. For example, perhaps no one is aware of the haiku, "Tsue arau Shikoku henro ya nurumu mizu", which was published in the magazine, Hototogisu in April, 1909. In fact, a lot of haiku like this were included in collections of haiku poems and haiku magazines from the Meiji, Taisho and Showa periods. There were many that existed of which some were written by such famous haiku poets as Takahama Kyoshi (1874-1959) while others were written by unknown haiku poets from local areas. Not only haiku poets, but, for example, manga artists also produced many travelogues about the Shikoku pilgrimage. For example, Miyao Shigeo (1902-1982) published "Shikoku Henro" (1943) during the Pacific War and Tsuge Yoshiharu (1937- ) published "Nagare Kumo Tabi" (1971) after the war both of which describe the landscape of the pilgrimage route. However, few are aware of the travelogues by haiku poets and manga artists today. Therefore in this paper I first introduce literary works that deal with the culture of the Shikoku henro and then highlight such aspects as their characteristics and historical background.

## はじめに

「近現代文学作品と四国遍路文化」という関係は、一般的に次のように想定されることが多い。第一に、「有名文化人の遍路紀行文」である。代表的な作品は、高群逸枝 (1894～1964)『娘巡礼記』(九州日日新聞、1918)、種田山頭火 (1882～1940)「四国遍路日記」(1939)であろう。多くの人々がこの二作品から思い出す文章は、『娘巡礼記』ならば柏坂の眺めの美しさを記した部分や、「四国遍路日記」ならば久万高原町や大宝寺を記した部分かもしれない。ただ、二人の作品はあくまで「遍路」自体が目的であり、従って札所等の寺院に関する言及は多いが、遍路道そのものや周りの風景に関する言及は少ない。近代に二人が残した有名作品は、札所等の「点」に関する言及は多く、遍路道等の「線」に関しては言及が少ないという特徴がある。

ところで、上記の二人は有名であるため今も広く知られるが、他にも多くの有名・無名文化人が四国遍路を作品に残していることはあまり知られていない。例えば、次のような俳句は全く知られていないだろう。「杖洗う四国遍路や温む水」(雑誌「ホトトギス」1909.4)。このような俳句は、明治・大正・昭和時代の俳句雑誌や句集に膨大に掲載されており、その中には高浜虚子のように有名俳人もいれば、地方の無名俳人も

多く存在していた。俳人だけでなく、例えば漫画家も遍路紀行文を多く発表しており、太平洋戦争期に宮尾しげを（1902～1982）が『四国遍路』（1943）を刊行し、戦争敗戦後にはつげ義春（1937～）が『流れ雲旅』（1971）で遍路の風景を描いている。しかし、今はこれらの俳句や漫画家の紀行文はさほど知られてないといえよう。そのため、本発表は遍路文化を扱った作品をまず紹介するとともに、その特徴や時代背景等を指摘していきたい。

## 1 「遍路」を描いた著名文学作品

「遍路」と近代文学で著名なのは高群逸枝『娘巡礼記』及び種田山頭火『遍路日記』であろう。『娘巡礼記』は二十代の女性が一人で遍路に赴くのは珍しかった大正年間に発表され、例えば南予の柏坂に関する一節がよく知られる。「七月二十二日細雨蕭々たり。雨具を纏うて出発、身はいよいよ名にし負う柏坂にかからんとす。(略)「海！」……私は突然驚愕した。見よ右手の足元近く白銀の海が展けている。まるで奇蹟のようだ（岩波文庫版）。険しい山道を経た後の、突然眺望が開けた感動を記した一節である。後に高群は女性史研究者として名を馳せたこともあり、『娘巡礼記』は遍路文化を舞台にした紀行文として著名になった。

また、自由律俳人として有名な種田山頭火の『遍路日記』は文章とともに俳句作品も収めており、例えば大宝寺を詣でた際、「朝まわりはわたくし一人の銀杏ちりしく」という自由律を詠んでいる。俳人として有名な山頭火が詠んだ作品のため、いわば“かの山頭火が札所の大宝寺で詠んだ句”として世に知られるようになり、現在では大宝寺に句碑が建っている（図1参照）。

ただ、『娘巡礼記』『遍路日記』は札所や善根宿、また道中で出会った人々との印象的な出来事に頁を割く傾向にあり、柏坂のくんだりや大宝寺での作品等はむしろ全体の中で少ない。遍路文化の中でも札所や宿泊所等の「点」に関する記述は多いが、遍路道にまつわる風景や文化等の「線」に関する記述は影を潜める傾向にある。『娘巡礼記』等は近代遍路文化を余すところなく体現しているわけでないことは留意すべき点であろう（同時に、近代文学における「遍路」紀行文が何を重視したかの特徴も示唆しており、興味深いのが、本稿では省略する）。

加えて、近現代文学で遍路を描いた作品は上記作品以外にも多々存在するが、その多くはさほど知られていない。例えば、種田山頭火の属する俳句ジャンルに限っても遍路を詠んだ句は膨大な数が存在するが、顧みられることは少ないため、次章で近代俳句の遍路関連の作品の一例を見てみよう。

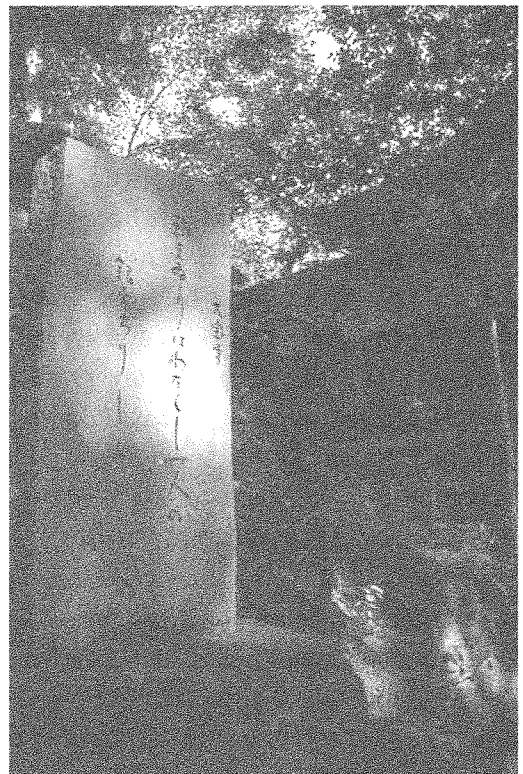


図1 大宝寺の山頭火句碑（2016）

## 2 「遍路」を詠んだ近代俳句の一例

近代俳句と「遍路」の関係を考える際には、いくつかの問題点が想定される。例えば、現在では「遍路」は四国遍路を指す春の季語として広く認知され、多くの歳時記（新年と春夏秋冬の五季節毎に季語を分類し、例句を列挙したもの）にも収録されているが、それは明治期からすでに——よりいえば江戸期から——季語として定着していたのか否か、という問題を考えてみよう。

「遍路」は春の季語として立項され、近代においても明治及び大正時代は「遍路」は季語として認知されていなかったと推定される。試みに、近代俳句で最も著名な俳誌「ホトトギス」掲載句を見てみよう。

遍路行く麓の寺のかすみかな 無一物 「ホトトギス」四号、明治三十（1897）年  
杖洗ふ四国遍路や温む水 秋霜 「ホトトギス」十二巻七号、明治四十二（1909）年

一句目は「かすみ」(春)、二句目は「温む水」(春)が季語の中心を担っており、「遍路」が春の季語という意識はさほど存在しない(近代俳句は一句中に一季語を前提とする場合が殆どであるため、春の季語をあえて二語詠みこむにはそれなりの理由が必要とされる)。二句目とはほぼ同時に刊行された期歳時記『新撰一万句』(今井柏浦編、博文館、1908、五版)を繙いても「遍路」は立項されていない。これは大正期から昭和初期にかけても同様で、次の例を見てみよう。

滝壺や遍路の為の杓一つ 立峰 「ホトトギス」二十三卷十一号、大正九(1920)年  
 遍路笠脱ぎもあへずや清水くむ 双葉  
 「ホトトギス」二十九卷十一号、大正十五(1926)年  
 お遍路や花菜畑を一筋に 一江 「ホトトギス」三十一卷九号、昭和三(1928)年

句意は省くが、季語の中心は「滝壺」(夏)「清水」(夏)「花菜畑」(春)であり、「遍路」は季語と認定されていない節がある。ただ、昭和初期になると次のような歳時記が散見され始める。

遍路 祈願のため、道中、食を乞ひながら八十八箇所を難場などを巡り歩くものをいふ、大抵三月頃より出づ。

つれむつみまぎれて別れて遍路かな 公羽

(『纂修歳時記 詳解例句』[今井柏浦編、修省堂、1932]、「春 宗教部」所収)

四国遍路のみ指すか否かは微妙だが、説明及び例句ともに「遍路」を春の季語として認識していることがうかがえよう。昭和十年前後になると「遍路」はほぼ完全に季語として認知され、「ホトトギス」でも多々見られるようになる。次は、「ホトトギス」を率いる高浜虚子が参加した句会記事である。

#### 遍路

幼き時遍路が抱きし我あはれ 虚子  
 松原をあらはれ／＼遍路来る 同  
 親追うて濱をかけるや遍路の子 奈王  
 石段を上り下りの遍路かな 東子房 (他句略)

(「ホトトギス」三十七卷九号、昭和九(1934)年、中村草田男記「草樹会」)

当時、「ホトトギス」は最も影響力の強かった俳句雑誌である。その「ホトトギス」誌上の句を虚子がまとめた『俳諧歳時記』(高浜虚子他編、改造社、1938、三十五版)春部でも「遍路」は立項され、加えて次のような説明文も付されている。

一般に三月頃から次第にその数を増やし、(略)五月上旬、日ざしも何となく初夏らしくなると、また忽ちのうちに淋れて来て、遂にその姿も見られなくなり、遍路の時節が終るのである。これは実に四国の田舎の春を飾る特異な情景であり、野趣の深い、豊かな郷土色の現はれである。遍路はまた同じ信仰の旅である「巡礼」とよく混同されるが、巡礼は所謂西国巡礼であつて、風俗習慣その他全然特殊なものであり、遍路のやうな色彩も季節感もない。(虚子執筆)

興味深いのは、愛媛県松山市出身である虚子は「西国巡礼」に季節感がないとし、四国の「遍路」こそ春らしい季節感を有すると強調している点であろう。確かに、現実の世界でも四国遍路が最も目立つのは春であり、夏の盛りから秋、冬よりは初夏あたりに遍路の姿を認める機会はいかもしれない。ただ、現実には遍路は春が多かったであろうことと、当時の俳壇で最も影響力を有した高浜虚子が「遍路」を四国遍路における春の季語として明確に位置付けたことは別問題であり、昭和十年前後から後は「遍路＝四国遍路の春の季語」を前提に句作がなされる傾向が顕著になる。例えば、香川県の俳誌「紫苑」掲載句を見てみよう。

三角寺裏より一人秋遍路 石川 笑月 「紫苑」十八巻一号、昭和十五（1940）年  
 とぼとぼと老ひし一人の秋遍路 小濱 有情 「紫苑」十八巻一号、昭和十五年  
 好日も諸願の一つ秋遍路 藤井 秀生 「紫苑」二十巻一号、昭和十七（1942）年

これらの句群は、「遍路」のみでは春になるために「秋遍路」と「秋」を明示することで秋季とし、加えていかにも「秋」らしい淋しき漂う情景——「一人」で「とぼとぼ」した様子や、「好日」に恵まれたという設定——を詠むことで、春とは異なる「遍路」風景であることを強調している。昭和十五年頃になると、「遍路」がのどかな春の景色を強く喚起させる季語として定着していたことがうかがえよう。

ところで、上記の「紫苑」は今やほぼ知られていない月刊俳誌であるが、香川の「ホトトギス」系の結社雑誌であり、土地柄ゆえに「遍路」を詠んだ句群をほぼ毎月号確認できる。試みに昭和十五～十九年から一句ずつ見てみよう。

客の来て籠たきかけし遍路宿 松山 神原 南人 十八巻一号、昭和十五（1940）年  
 なつかしき飛白そろひの伊予遍路 琴平 臼杵都久女 十八巻十号、昭和十六（1941）年  
 門前に経読む遍路の時雨けり 榎井 丸尾 義明 十九巻六号、昭和十七（1942）年  
 夕焼けて塩屋泊りの秋遍路 七箇 渡邊 芳月 二十巻十二号、昭和十八（1943）年  
 お遍路に春まだ寒き善通寺 本山 篠原 駄骨 二十一巻六号、昭和十九（1944）年

句意は省くが、「紫苑」に句を寄せる俳人の多くは四国在住で、戦時下においても「遍路」を詠んだ句が多数見られる上に、大部分の作者は無名とあってよい。上記作者の詳細も詳らかにしないが、「紫苑」のみでも相当数の「遍路」作品が掲載されており、またこのような地方俳誌は太平洋戦争末期まで全国各地で膨大に刊行されていた。文学研究上は「遍路」俳句が名品か否かの判断も重要かもしれないが、例えば種田山頭火といった著名俳人ではない無名俳人の「遍路」句が大量に詠まれ続け、それが毎月の各俳誌に掲載され続けたことは、「遍路」文化研究として注目すべき資料といえよう。

### 3 他俳人や漫画家の「遍路」

前章では無名俳人の句群を多く紹介したが、これらの作品を扱う際、留意すべき点はいくつか存在する。例えば、先述した種田山頭火の師である自由律俳人の荻原井泉水（1884～1976）が刊行した『遍路日記』（婦女界社、1941）の一節を見てみよう。

宇和島に戻つて、バスの会社に来てみると、大洲行の出るまで一時間程を待たねばならなかつた。（略）郵便局のそばに喫茶店があつた。そこにはいつて、女給がサァヴィスぶりにかけはじめたレコードを止めさして、私は葉書や手紙を書いた。コーヒーは何があるのかと質ねたらば、妙なことをきく遍路だといふ風なげげな顔をして奥へさきへ行つて、ブラジルとモカのミツキスですとの返事だつた。十日の旅のうちでコーヒーの飲める所は爰と高松の二ヶ所しかあるまいなどと考へるのも、遍路としては、ちと過ぎた道楽かもしれないが…。(「日日是好日」、昭和十三年執筆)

井泉水はもとより歩き遍路を志す気はなく、乗合自動車（バス）を利用できる箇所は利用し、便利な「十日の旅」を想定している。バスの待ち時間に喫茶店に入り、「ブラジルとモカのミツキス」の「コーヒー」を愉しむ井泉水は当世風のモダンな「遍路」を誇示するかのようになり、「バス」「喫茶店」「女給」「コーヒー」といった語彙をふりまきつつ、遍路旅行記を記していた。

一方、井泉水『遍路日記』とほぼ同時期に漫画家の荒井とみ三（1902～1971）が刊行した『遍路図絵』（新正堂、1942）には、次のような一節と挿絵（図2参照）がある。

行脚が原則となつてゐる遍路の旅にも、汽車電車バスなどの乗物を利用出来る区域が、かなり多い。しかし、遍路は出来得る限り乗物を抹殺して歩く。（略）もしもクル

マのなかに巡礼姿を見かけると、歩く遍路たちは軽侮に似た一瞥を与へる。そして日程を早めるためにクルマに乗り合はせてあるお遍路は如何にも申訳なさうに頭を垂れたり視線を外らしたり、次の停留所で、そくさと下車したりする。時勢の波は、この乗物のなかに、馬車を登場せしめた。遍路と馬車、これは乗物のうちでも一番しつくりした遍路風景である。

「歩く遍路」こそ「巡礼」のあるべき姿で、「汽車電車バス」は「軽侮」されがちとしつつ、「馬車」は「遍路風景」に似つかわしい「乗物」と述べたくだりである。おそらく、昭和十六、七年当時も荒井とみ三が記すように「歩く遍路」こそ正統である、という意識が強かったと推定され、ゆえに先述の荻原井泉水は、あえて近代文化を象徴する「バス」「コーヒー」等の「ちと過ぎた道楽」（前掲引用文）とともに「遍路」を巡るポーズを強調した可能性が高い。井泉水は、江戸期から季語と定型を重視する俳句ジャンルにおいてそれらを無視した自由律を提唱した俳人で、自身が主宰する俳句雑誌「層雲」では大正初期より西洋の絵画や音楽、哲学等を盛んに紹介しており、この点、彼は以前から継承された伝統遵守よりも率先して近代文明や発想を取り入れる俳人であり、ゆえに『遍路日記』でも「バス」等の交通機関を誇示した巡礼記を発表したといえる。

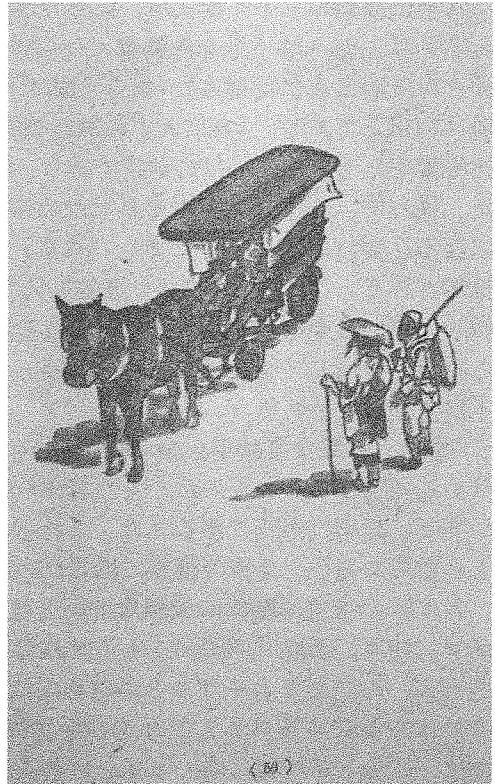


図2 荒井とみ三『遍路図絵』より

ここで考慮すべきは、荒井とみ三と荻原井泉水それぞれの作家のありようが「遍路」の表象に関わる、という点であろう。荒井の『遍路図絵』が一般的な「遍路」のありようを踏まえた記述だったとすれば、文学作品としては凡作と見なしうる一方、当時の常識的な「遍路」を忠実に表象した作品であるゆえに、昭和十年代の戦時下における「遍路」文化を考察する貴重な資料と捉えうる。かたや荻原井泉水『遍路日記』は一般的な「遍路」のあるべき姿を踏まえた上で、そのイメージからいささかずれた「バス」等を——とはいえ、昭和期には「汽車電車バス」等の交通機関が「遍路」に深く食い込んでいた可能性があるのだが——前面に押し出すことで新鮮味のある文学作品を形成しようとした、と見なしうるだろう。

加えて、荒井とみ三が『遍路図絵』で示したように、「遍路」はあくまで「行脚が原則」で、「乗物」として相応なのはせいぜい明治期を想わせる「馬車」であるという感慨は、むしろ井泉水が『遍路日記』で記した「バス」等が急速に浸透して「行脚が原則」という感覚が薄らいできたために、かえって強調されるようになった可能性もあろう。例えば、荒井と同じ漫画家の宮尾しげをが刊行した『四国遍路』（鶴書房、1943）には、次のような一節と挿絵（図3参照）がある。

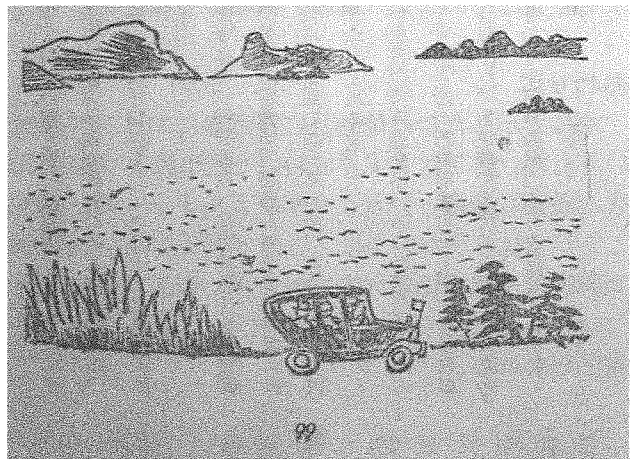


図3 宮尾しげを『四国遍路』より

雨が降つてゐるので、馬が泣きかけたりする。村をはずれて下り道になると、走るは走る鳥も丘も山も田も、後へ飛んでゆく。東京人には馬車は珍しいので、少々うれしくなった時「四十番さん（＝観自在寺、引用者注）ですよ」と降ろされた。（略）平城から乗合自動車で宇和島へと向ふ。この間、十里五丁、海岸線は、地図で見ると古文書の蟲ツ喰ひのやうに、離れ島、岬が複雑してるだけに、景色が面白い。柏坂から岩松間の眺めに由良の岬がパノラマのやうに見られる。遍路道は観音岳の上を越して行くので、海岸線を通る自動車より、眺めは更によいと云ふ。

宮尾は高知の三十九番札所、延光寺から四十番の観自在寺に向かう際には「馬車」を利用し、観自在寺から宇和島方面へは「乗合自動車」(バス)を使用した。萩原井泉水のように強調するわけではなく、また荒井とみ三のように「馬車」「乗合自動車」いずれが「遍路風景」にふさわしいかと考慮することもなく無頓着に利用しており、「東京人」の旅行気分で「遍路」を捉えていることがうかがえる。宮尾は大正時代の流行漫画家だった岡本一平の弟子であり、都会的かつ飄々とユーモラスなイラストを得意とする漫画家であった。従って、人生の辛苦やそれなりの事情に駆られるように遍路に赴いた「歩く遍路」(前掲『遍路図絵』)になる必要はなく、どこまでも「東京」から訪れた旅行者として、「遍路風景」をなぞれば満足であったと推定される。この点、「バス」等の近代交通機関について、俳人の井泉水や漫画家の荒井、宮尾それぞれが微妙に異なる姿勢を示したのは、それぞれの作家のありようや作品の性格も絡まっている可能性が高い。彼らの作品を通じて昭和戦前期の「遍路」のあり方を考察する際、やはり各作家の性質や特徴等を踏まえつつ考察する必要がある。

同時に、「乗合自動車」や「馬車」がいつから普及し始め、それらはいかなるイメージを伴って「遍路風景」に浸透していったのか、また具体的に「遍路」のどの地域で発達し、どの程度の料金や時間であったのか等々、詳細は不明であるため、これらの作品分析を通じて昭和戦前期の「遍路」の変容等を調査することも必要であろう。今後の調査に待ちたい。

各作家の特質や時代の風潮等でいえば、戦後漫画界を代表するつげ義春の『流れ雲旅』(共著、朝日ソノラマ、1971)所収「四国おへんろ乱れ打ち」では、つげ一行が札所を順不同で打ちながらの安楽な旅行記とともに、つげ義春のイラストが収められている。つげは、「ねじ式」(初出は月刊マンガ「ガロ」、1968)等のシュールレアリスムじみた奇妙な世界観でカルトな人気を誇る作家であるが、「四国おへんろ乱れ打ち」では、昭和三十年以降の水木しげるといった妖怪マンガを連想させる不気味なタッチで南予の外泊地区の石垣や明石寺を描いた。このイラストについて、つげ義春という作家の特徴に加え、高度経済成長と西洋化を謳う戦後日本からこぼれ落ちた、土俗的でどこかな地方の「風景」が見出された1970年代の「ディカパー・ジャパン」的なまなざしを重ねた分析も可能かもしれない。つげの描いた「遍路」は、いかがわしさを伴った怪しげな庶民信仰のありようを垣間見る旅行者のまなざしに支えられており、そこには湿気を帯びた暗闇が甘美な重苦しさが漂っているかに感じられる。いずれにせよ、当然のことであるが、同じ漫画家でも昭和十七、八年の宮尾しげをらと同四十五年前後のつげ義春で「遍路」のイラストでも様相を異にしており、それぞれの作家及び時代の特徴等を踏まえた上での「遍路」表象分析が必要であると同時に、作家による差異はそのまま「遍路」表象の多様性を示すことにもなる。

## おわりに

本稿で示したのは俳句及び漫画界における「遍路」表象のごく一例であり、それらの紹介をしたに過ぎない。ただ、俳句は文学界においては小説より注目されることが少なく、いわば傍流とされるジャンルであり、また漫画も芸術というよりサブカルチャーの一端と見なされる傾向にあるため、研究対象として顧みられることがやはり少ない上に、さほど著名でない作家の作品が取り上げられることは多いとはいえない。しかし、高群逸枝や種田山頭火といった多くの人々に知られる作家にのみ焦点を絞るのではなく、むしろ萩原井泉水やつげ義春のみならず、無名の地方の人々の作品等を渉猟することもまた、「遍路」表象を考察する上では貴重と思われる。

春光や男米磨く遍路宿 清水 幾世 「俳句研究」一卷二号、昭和九(1934)年  
 春寒の練兵場を行く遍路 美石 「紫苑」二十一卷六号、昭和十九(1944)年  
 いちめんの花野に遍路汽車降りる 森田 洋月 「天狼」六卷七号、昭和二十八(1953)年  
 遍路の餉頭陀袋から麵麴が出る 佐野まもる  
 「馬酔木」四十卷七号、昭和三十六(1961)年  
 遍路バス輪袈裟をかけて運転手 山岡 出水  
 「ホトトギス」七十一卷九号、昭和四十三(1968)年

これらは一例であるが、全国各地の俳誌を繙くと、上記のように「遍路」を詠んだ句群が膨大に存在して

いたことがうかがえる。普通の生活では「米磨く」ことをしないであろう「男」が、不器用そうに「磨く」といういかにも「遍路宿」らしい雰囲気や（引用の一句目）、戦時下の厳しい戦況と統制の日々にあつて、余寒の残る「春寒」のある日、空疎なまでに広々とした「練兵場」ととぼとぼと思いつめたかのように歩く「遍路」の風情（二句目）。暑い夏と入れ代わるように爽やかな秋が訪れ、一面に草花の咲き乱れた「花野」にさしかかった時に「汽車」から降り、「花野」へ向かってゆく「遍路」の秋らしい光景もあれば（三句目）、巡礼の旅らしくいかにもつつましい「頭陀袋」と思いきや、その袋から意外にも洋食の「麵麩」を取り出した「遍路」（四句目）に対する軽い驚き、あるいは「遍路」一行を「バス」に乗せた「運転手」が「輪袈裟」をかけて運転する姿は、やはり日常の「バス」の情景からすると珍しく、「遍路」らしい風景と感じる一方で、「歩く遍路」（前掲の荒井とみ三『遍路図絵』）を原則とした「遍路」の常識からするとどこか奇異にも感じなくもない……という感慨（五句目）。一句ごとに見ると、必ずしも文学上の傑作ではないかもしれないが、これらの句群の背景に広がる各時代の「遍路」文化のあり方や変容等を考察する際、むしろ平凡で、当時一般の常識を踏まえた凡作群を足がかりにした方が、発表時の多くの人々が感じていた典型的な「遍路」のイメージを考察することが可能であり、どの点が「遍路」らしい常識的と考えられ、その時期には何が変化し、どのような行いや風情が変わっていると見なされたのか——上記句でいえば「麵麩」を食べる「遍路」の姿や、「輪袈裟をかけた運転手」など——等々、各時代の「遍路」文化を検証する上では上記句群こそ貴重な資料といえよう。この点、漫画家が記した遍路旅行記の挿絵等も同様に当時の時代の雰囲気を今に伝える資料といえよう。

同時に、それらを踏まえた上で、例えば荻原井泉水やつげ義春といった、作家としての特徴を發揮しうる作者がいかにも「遍路」を表象したかを、各作者のありように着目しつつ考察することで、近現代文学及び文化が描いた「遍路」文化の多様な姿を浮き彫りにしうるのではないか。

とはいえ、本稿で取り上げた俳句や漫画等の各ジャンルでは包括的な調査や研究が今だ端緒に就いたとはいえない状況にある。本稿が紹介した資料等が今後の調査の一助となれば幸いである。

#### 【付記】

本研究は、平成25年度科学研究費補助金（基盤研究B）「四国遍路の学際的総合研究—地域資料によるその実態解明と国際比較—」（研究代表者 寺内浩）による研究成果の一部である。